

経書の行方・序章：科学終焉の時点に立って

著者	加賀 栄治
雑誌名	中国文化：研究と教育：漢文学会会報
巻	54
ページ	1-15
発行年	1996-06-29
URL	http://doi.org/10.15068/00150196

經書の行方・序章

——科挙終焉の時点に立つて——

一

清朝も終わりに近い光緒三十一年（一九〇五）、それまで千三百余年にわたって続いていた科挙、官吏登用試験制度が、前年の光緒三十年（一九〇四）に行われた恩科を最後として爾後、廃止されることとなった。『清史稿』巻二十四、「德宗本紀、二」、光緒三十一年八月の条下で、

甲辰、詔廢科舉（八月四日、甲辰の日、詔して科挙を廢す）。と記されているのがそれである。

これは、「德宗本紀一、二」を通覧し、光緒帝の治世三十四年間（一八七五～一九〇八）に頻出する大事、清仏戦争（一八八四～八五）・日清戦争（一八九四～九五）、そして続く列強による中国海岸要衝地区の租借（一八九八）、更にその後の戊戌政変（一八九八）・義和団の乱（一九〇〇）・辛丑条約（一九〇一）等の記載と比べてみれば、ほとんど国内的な一小

加賀栄治

事の如く見えるかもしれない。しかし、中国の長い政治制度史、特に官吏を登用する考試制度の歴史や、それを支えて来た社会の文化史・精神史からみれば、これはやはり、大きな節目ともいうべきものであり、その後に来たる學術・思想・教育・文化が、大きく変化するメルクマールでもある、と考えられる。

中国において、科挙、すなわち一定の科目を立て、試験によって官吏を登用する制度は、周知の通り、隋代に始まり、唐代に盛んとなり、宋代に整備され、明・清に至って極まったものである。そして、それらの概要を記載しているのが、『新唐書』に始まる歴代正史の「選舉志」（『遼史』のみは「選舉志」がない）である。『清史稿』でも、また「選舉志」が立てられていているが、そこでは、光緒三十一年の科挙停廢を記載した後、

是に於いて、沿襲すること千余年の科挙制度は、根本

より剷除せられ、嗣後、学校は日に漸に推广せられ、學術思想も之に因りて變遷す。此れ其の大關鍵なり（『選舉志』、学校二）。
と言っている。

私は今、この科挙終焉の時点に立つて、それが學術思想變遷の大關鍵といわれる實際的意味内容を考え、その視点を、科挙廃止の直接的理由から、次第に移行させつつ、ついには、科挙の根柢たる經書の行方がどうなるであろうか、に至ろうとするものである。

二

まず問うべきは、千三百余年も続いていた科挙が、清朝の末年に至って、なにゆえに廃止されることになったか、その点であろう。

もとより、物盛んなれば則ち衰え、物極まれば則ち變ず。科挙廃止に至る必然性は、長い間にわたって実施されて来た、科挙の実態内容とその推移の中から求められるであろう。しかし、それを今ここで詳述する余裕がない。それはしばらく、科挙の歴史や実態を説く專著（例えば、宮崎市定『科挙』秋田屋版、同『科挙——中国の試験地獄』中公新書版、今共に『宮崎市定全集15科挙』所収、一九九三、岩波書店、など）

に委ねておく。ここではまず、科挙廃止の時点において当路の要に在り、直接そのことに関わった者たちの発言に、耳を傾けることから始めたい。

今、『皇朝統文獻通考』卷八十七、「選舉考四、舉士」では、光緒三十一年、「袁世凱・張之洞等、科挙を罷めんことを奏す、略に称すらく」として、ほぼその奏請の全文を掲げている。その奏請において、科挙の停廃を急ぐべしとする直接的理由は、科挙を廃止して新教育制度・「学堂教育」を推進しなければ、現在危殆に瀕している国情を建て直すことができない、とするが故であった。すなわち、

科挙の弊は、古今、人（人一般ではなく官界の要路に在る人）これを言うこと藁（も）めて詳らかなり。而うして科挙の、学堂を阻礙し人才を妨誤することは、臣世凱・臣之洞等、亦迭に奏陳を経ること久し。（中略）臣等、大局を默觀し、時趨を熟察するに、見在の危迫せる情形は、更に曩日よりも甚だし。而るに科挙一日停せざれば、士人は皆得第（科挙合格）を微俸する心を有ち、以て其の（学堂での）砥礪実修の志を分かつたん。（中略）故に時艱を補救せんと欲すれば、必らず学校を推广するより始むべく、学校を推广せんと欲すれば、必らず先ず科挙を停するより始むべし。

と言うのが、その要であり、科挙の停廢と新教育制度の推進とは、いわば表裏の關係において一体をなすものとなっている。

ところで、ここに言う「学堂」とは、端的にいつて、欧米や日本などの近代教育制度に範を採った、系統的・一貫的な学校教育制度を指す。そして、その新教育制度に基づく教育改革は、光緒二十七年（一九〇一）の方針決定に始まり、翌二十八年（一九〇二）の「欽定学堂章程」で成案を得、更にその翌二十九年（一九〇三）の「重訂学堂章程」に至って、頒布施行されることとなったものである（「学堂章程」制定の推移とその内容は、『清史稿』『選舉志』、学校二、参照）。

なにゆえに、この「学堂教育」を推進しなければならぬのか。また、それと表裏の關係において、科挙を廢止しなければならぬのか。それは、前掲、袁・張らの奏請で言う「欲補救時艱、必自推广学校始」めなければならぬからであり、その「時艱」は「危迫情形」となっているのに、科挙は「阻礙学堂、妨誤人才」しているからであった。『清史稿』卷一百六、「選舉志序」で、

末造に泊^{とど}んで、世変は日に亟^{いそ}かなり。論者謂えらく、科目の人才（科挙で登用した人材）は、時務に應ずるに足らず、毅然として科挙を罷^{とど}め、学校を興すべし、と。「か

くて」東西各国の教育の新制を採り、唐宋以来の選舉の成規を変ぜり。

と言うのもまた、同じ意味を、歴史の結果に立つて述べたものと解し得よう。

さて、右に「時艱」と言い、「世変」と言う、清朝政府が対処しなければならなかった内外の艱難変事は、やはりまず、道光二十年（一八四〇）のアヘン戦争から指を屈するべきであらう。それは、中華帝国を根柢から揺さぶるものであり、ついには帝国の滅亡をもたらす大きな震動であった。清朝は、その後に続く太平天国の乱（一八五〇～六四）、アロー戦争（一八五六～六〇）を経て、斜陽落日の道をひた走りに走り、やがて光緒の治世から宣統の治世へと至り、辛亥革命（宣統三年、一九一一）を迎えるのである。

もとより、その間に、「時艱を補救」し、「世変」に対処せんとした改革運動が興った。しかし、軍事中心の富国強兵を図るべく、近代化の営為を盛んに行った「洋務運動」は、清仏戦争・日清戦争で一敗地にまみれた。「中体西用」から「変法自強」へ、西洋の軍事力・技術力の基をなす制度・教育を撰取し、中国のそれを全面的に改革すべしとする「変法運動」も、戊戌政変であえなく潰えた。その後、「時艱を補救」することは常に後手にまわり、「世変」は速

やかに進んで行く。「変法運動」に代わって興るのが、滅満興漢を目指す「革命運動」であり、その果てに清朝が減ぶ辛亥革命が到来したことは、もはや説くまでもあるまい。

清朝政府が、全面的な制度改革に踏み切り、新教育制度の制定・実施に至ったのが、戊戌政変の後七年であり、科挙廃止の詔は、更にその翌々年である。また、憲法大綱が制定され、憲法発布・国会開設の期限（一九一六年とする）を公示布告したのが、実に、光緒帝崩御の直前（一九〇八）であった。ここに至る過程を振り返ってみれば、それらのすべてにつき、手遅れの憾は免れないであろう。

しかし、手遅れであったというのは、それらの制度改革が無意味であったというのではけつしてない。たとえそれが、時勢の「危迫した情形」に押し詰められた結果であったとはいえ、また、その結果の効を直ちには見ることがなかったとはいえ、新教育制度の制定・実施などは、中国近代化のため当然なされるべきもの、必至の営為である。

したがって、もし新教育制度の実施を妨げるものが科挙であるとするならば、科挙の廃止はまた、歴史の必然の結果であったといわねばなるまい。実は、その時点で科挙は、形態上からも内容上からも、極まっていたのである。

先に私は、明・清の科挙を、科挙制度としては極まった

ものと言った。それは、外すなわち制度の組織形態と、内すなわち実施の内容方法との、内外両方において、ほとんど極度といってよい状態にあり、そこからもたらされる弊害も、極まったことを意味するものである。次には、その問題に視点を移行したい。

三

中国においては、古来、公的に学校が設立される場合、そこで養成される人材は、制度としての学校の規模・種類や、その所在のいかににかかわらず、常に国家有用の人材、すなわち官吏となることが要請されていた。したがって、歴代正史の「選舉志」においては、叙述の量の多少・精粗にかかわらず、必ずといってよいほど、学校教育制度や学校試に言及されている。そして明・清に至ると、この学校教育が、制度的に科挙と密着した関係となっている。清代の学校教育は、前述した清末の「学堂教育」制定以前は、全く明代の学校教育の形態を踏襲してなされていた。

有清の学校は、向に明制に沿う。京師に国学と曰い、並びに八旗・宗室等の官学を設く。直省に府・州・県学と曰う（『清史稿』「選舉志一」、学校一七）。

右の「八旗宗室等官学」は、もとより明代とは関わりなく、別格とすべきもの。学校は、明・清ともに、国学と府州県学との二つに大別されるが、この学校の教育が、実は、科挙の予備校的関係にあったのである。

『明史』巻六十九、「選舉志序」では、次のように言っている。

選舉の法には、大略四有り。曰わく学校、曰わく科目（「科挙」、曰わく薦挙（漢の察舉に当たる推薦制で、国初に行われ、間もなく廃止）、曰わく銓選（任官に当たつての選考で、試験ではない）なり。学校は以て之を教育し、科目は以て之を登進し、薦挙は以て之を旁招し、銓選は以て之を布列す。天下の人才は是に尽くせり。

明制は、科目を盛んと為し、卿・相は皆此れより出で、学校は、則ち才を儲わえて以て科目に應ぜしむるものなり。其の学校通籍（学校の入学試験に合格して学校に籍を置くこと）を徑由するは、亦科目の亜（次のもの、前段階的・予備校的なもの）なればなり。

すなわち、「選舉之法」は四つあるが、実質的には、試験が行われる「学校」と「科目」との二つであり、「学校」は教育機関、「科目」は官吏登用試験で、別個の如く言いながらも、実は、「学校」は「亦科目之亜也」であつたので

ある。

つまり、明・清の学校教育制度は、ほとんど全面的といってよいほど、科挙の考試制度に繰り込まれてしまった。だからこそ、右に続く「選舉志」の冒頭で、「科挙は必ず学校に由る」と言っているのであるが、その結果、科挙制度全体の組織形態は龍大なものとなった。龍大化は、その反面、各段階ごとに課せられる試験の数がふえ、ふるいに掛けられる回数が増大したことを意味する。

もともと科挙は、誰でもが受験できる開放性と、その試験の厳しさ・公平性とを特長として生起し、発展し、持続されて来たものである。ところが、隋・唐はさて置き、宋代に至ると、科挙に應ずる者がおびただしい数となった。しかし、任用できる官職には限りがある。科挙制度が宋代に至って整備されたといわれるのは、科挙の本旨に立ちながらも、いかにしてふるいに掛けて良質の人材を得るか、そのための形態と内容の整備であつた。明・清に至ると、科挙に應ずる者はいっそうふえた。学校を科挙に繰り込んだのは、組織形態のさらなる整備を図つたことではある。しかしそこでは、誰でもが受験できる開放性の拡大した形を採りながらも、一方、その厳しさ・公平性を堅持せんがため、段階ごとに課する試験の数が、前代よりもいっそう

ふえることとなった。

今、学校を含めた明・清の科挙制度の組織形態を、試験の面から概観してみよう。まず、試験の種別からいえば、学校の入学試験（学校通籍）である学校試と、普通文官試験である郷試（省都所在地で受けるもの）と、高等文官試験である会試（中央政府所在地で受けるもの）、及び殿試（また廷試。会試合格者が最終的に天子のもとで試験されるもの）とに大別される。そして、これらに合格した後の資格名をいえば、学校試に合格して生員とされ、郷試に合格して挙人とされ、会試に合格し殿試を通して進士とされる。

以上がその大綱であるが、一たび、それぞれの試験で実際に行われる回数・段階を見ると、実に複雑に重層化されている。学校試で生員となるためには（国学）の場合は、略す、まず県や州・府に設けられた県学・府学で、知県・知府が主宰する入学試験を受けて童生となり、その童生が府または州に設けられた学院で、中央から派遣された学政官が主宰する歳試（院試ともいう）に合格しなければならぬ。この生員が、次の科挙試、郷試に応ずるためには、その基礎資格として科試を通らなければならず、郷試に合格して挙人となった者も、更に挙人覆試を通らなければ、最上級の会試に応ずることができない。

このように、次々と設けられている関門を通過して、ようやく最上級にまで達し、進士の資格を得ることは、もとより並大抵のことではない。当然、各段階ごとに、ふるいに掛けて落とされ、待機しなければならぬ者の数が増す。恐らく、科挙浪人は龐大な数であつたろう。また、その待機年数も長かった。その間、憂き身をやつして受験準備に努めなければならない。資力の消耗は大きいし、何よりも心身共に疲れ果てる。

しかも、組織形態が大であればあるほど、ふるいに掛けられた待機浪人は、低段階ほど多くなる。そこには、さまざまな社会現象が見られたであろう。吳敬梓（一七〇一—五四）の『儒林外史』に描かれる人物には、なんと「白首の童生」が多いことか。魯迅（一八八一—一九三六）の小説「孔乙己」の主人公は、幾度受けても生員（秀才）にはなれず、童生どまりでいるうちに科挙が廃止され、魂の抜けがらのまま衰れにも消えて行った。

にもかかわらず、科挙を目指す者はけっして減ることなく、むしろふえ続けていった。それは、ただ開放性のためのみではない。清初以来の規定では、一たび院試（歳試）に合格して生員となれば、徭役が免除され、給費生ともなり得るし、何よりも社会的・政治的には礼遇を受け、法的に

も保護される(『清会典事例』卷三百八十九「礼部、学校、考試規條」参照)。だから生員は、俗に「秀才」ともよばれ(『日知錄』卷十六、秀才)、童生の家族は、必死になって秀才を期待し応援した。「白首の童生」がふえ続け、第二、第三の孔乙己がなお出るであらうわけは、ここにある。しかもそれらがふえ続けることは、生産農民からみれば、百害あって一利なしといわねばなるまい。

この、科挙制度の老大化がもたらす弊害を衝き、生員制の廃止を主張しているのが、顧炎武(一六一三―八二)の「生員論」である。今、『亭林文集』卷一に載せる「生員論上、中、下」は、恐らく顧炎武の若いころ、明末に書かれたものであらう。それは要するに、老大なる数の遊民的存在となっている生員の実態と、その被害を指摘し、且つまた、受験準備オンリーの学習から生ずる学問の質の悪さを衝き、学校を繰り込んだこの制度を廃止して、古制に復すべしと主張したものである。

のみならず、この科挙の組織形態の老大化、学校が科挙の予備校と化してしまったことは、より根本的な問題へと関わって行った。学校では、広い知識・技能の修得や人間形成など、本来の教育がなされなくなったことである。明・清の学校は、その名はあれども実はなし、教官には教

育の実がなく、生徒は、ただ試験を受ける時だけ登校することとなった。これは、国家による教育の放棄であり、教育が、民間・各家庭へと、全面的に委託されてしまったことを意味する。これでは国家が、時勢の推移変化に応じて教育制度を改革しようとしても、それは甚だ困難なものとならざるを得まい。清朝における新教育制度の制定・実施が、その滅亡に近い時期に至ってようやくなされたわけも、実はここにあったのである。

四

明・清の科挙がもたらした弊害は、その制度の組織形態から指摘されるだけではない。むしろ、科挙で実施される試験の内容方法の面から指摘し、それを批判する発言が、古来、より多く且つ痛切であったようである。

『明史』卷七十、「選舉志二」では、明の科挙試、すなわち学校試の次の段階、郷試・会試について述べられているが、その冒頭で次のように言っている。

科目は、唐・宋の旧に沿うも、しばしば稍に其の士を試するの法を變じ、専ら四子書(四書)及び易・書・詩・春秋・礼記の五經の命題もて士を試するを取る。蓋し太祖の、劉基とともに定めし所なり。

其の文は、略宋の經義に仿^倣うも、然れども古人の語氣に代わりてこれを為^つらしめ、体用排偶せしめて、之を八股と謂い、通じて之を制義と謂う。

これは、明代の（清代もまた同様の）科挙試の内容方法につき、郷試でも会試でも、その試験場では、「四書」・「五經」の經義題が出され、その題が提示する義（經書の意味・精神）を論述すること、その場合の文章は、古人の語氣に代わって表現すべく八股文の法式に拠ること、その二点に集約されることを述べたものである。

しかし、要約すれば右の二点に尽きるとはいえ、それは明・清の科挙試の内容方法の全部を言ったものではない。すなわち、明・清の科挙試は、三場（三つの試験場）で行われ、首場（第一試験場）では「四書義三道（三題）、經義四道」、二場では「論一道、判五道、詔・誥・表内科一道（判以下は官序公文書形式作文）」、三場では「經史時務策五道（八股文で書く必要がない）」が、試験されることとなっている（『明史』『選舉志』）。

またしかし、これら三場の試験があったとはいえ、その中で重点是、まさに首場に在った。受験者が八股文で書くのは、首場の答案についてのみであり、試験官もまた、「主司」、卷（受験者の答案）を閲するや、初場中する所の卷

（合格と判定できる答案）を復護（繰り返し点検）すれども、其の二・三場を深求せず」（『日知錄』卷十六「三場」）であった。つまり、可否が決まるのは、ほとんど首場の答案によってであり、前掲『明史』が集約して言っているのは、それを指したことになる。こうなると、受験者が最も力を注ぐのは、当然首場の答案であり、「四書」・「五經」の經義題に対し、いかに論旨を組み立てて全体構成を図るか、また、それを八股文によって、いかに古人の語氣を再現させて典雅なものにするか、ということになるであろう。

四書義・五經義の出題は、ほとんど皆、「四書」・「五經」の中の句や節を採ってなされた。例えば、「君命召不俟駕行矣」は、『論語』郷党篇の一章の二句であり、「以杖叩其脛闕党童子」は、『論語』憲問篇の「原壤夷俟」章の末句と、次章の冒頭四字とを合わせたものである。前者はさて置き、後者は、題内二句の義をどう関連づけて論述するか、かなり工夫を必要とする。論旨の組み立てや全体構成に、相当苦心しなければなるまい。

また、その題の提示する義を、八股文の方式によって論述するには、まず「破題」で、二句または三句を用いてすばり題意を概括し、「夫」字を用いてそれを承ける「承題」で、題意を確認した上で、なぜこれを論述するかを、八句

または十句ほどで述べる。それが「起講」とよばれ、そこまでがいわば序論に当たる。その後、八つの排偶（いわゆる八股、四組の対偶的形式）を用いて本論を展開させ、そこが最も多い字句数となり、最後に四句で収結させる。これが、いわゆる八股文の文章形式、法式となった文体である（八股文の法式等については、清の梁章鉅の『制義叢話』、及び鈴木虎雄『支那文学研究』『八股文の沿革及び形式』、一九二五、弘文堂書房、参照）。

こうした文体で経義題の答案を書くことが法式となったのは、顧炎武によれば、明の憲宗の成化二十三年（一四八七）の会試からであるという（『日知録』卷十六「試文格式」）。その淵源をさかのぼることはさて置き、こうした文体を駆使して文章を作ることとは、それ自体が容易なことではない。その上それを、出題された経義題に即して論旨を貫通させ、古人すなわち経書の語を吐く聖賢の語気を、そこに再現させなければならない。かくして、受験者にとって、八股文という文章形式の習練と、想定される経義題にとづく論述の習熟とが、必至の要請となってくる。

その場合、その習練・習熟に資する方途をどうするか。もとより、まっとうに対処する道は、「四書」・「五經」の基本的学修であり、また古来の名文を見習って、まず文章

に上達することである。しかし、その道をたどれば、極めて長い歳月を要することとなる。既に組織形態が老成化された明・清の科挙では、応試する人数の増加がおびただしいばかりか、通過しなければならぬ関門の数が、一つや二つだけではない。そこで人々が求める道は、いかにして捷徑に就き、習練・習熟を図るかであった。その捷徑とは何か。過去の科挙合格者の模範解答を手にし、それを抄写勦襲して習練し、出題傾向を調べ上げて模擬題を想定し、それに基づいて習熟することである。

明・清の社会文化環境、印刷出版物の普及は、その捷徑に就く便を、科挙の受験者に大いに与えた。明・清においては、「墨卷（科挙合格者の模範解答文）」も、またそれに付される「程文（試験官の標準解答文）」も、刊刻して公示された。書肆がそれを見逃す訳はない。直ちに版を起こして増刷し、人々の求めに応じた。「墨卷」・「程文」や「房稿（進士の解答文）」・「行卷（挙人の解答文）」等が、盛んに出回ったことはいままでもあるまい（『日知録』卷十六「程文」・「十房」、参照）。かくして、世に出回る出版物は八股文一色の如くになり、似たりよったりの八股書籍に覆われるかのようになる。「制義」（また「制芸」とよばれた八股文が、また「時芸」・「時文」とよばれたゆえんである。また後世

「八股」が、「空疏な形式主義」の代名詞の如く用いられるのも、この「時文」の抄写勦襲のみを事としたためである。

なおまた経義題が、前述の如く「四書」・「五経」の中の句や節を採ってなされるとすれば、題そのものの想定も、類推によっていろいろと試みられ、想定問題集が作成され、それに基づき習練がまた盛んとなる（『日知錄』卷十六「擬題」、参照）。しかもその際、過去の出題では、例えば『礼記』の喪礼・喪服関係や、『詩経』の淫風・変雅などからは、ほとんど出されていないことがわかると、経書の中のどこを読み、どこを読まなくともよいか、経書学修の手抜き案が立てられてくる。こうして、模擬題想定とそれに基づき習練は、「本経も亦以て読まざるべし」、学ばざる経書をあちこちに作ることとなったのである（同上）。

顧炎武が、その有名な経世的読書ノート、『日知錄』（初刻自序は、康熙十五年、一六七六、三十二卷本の刊行は、康熙三十四年、一六九五）の中で、「今の経義論策は、其の名正しといえども、空疏不学の人に便なり」（卷十六「経義論策」と言い、「八股の害は、焚書に等し。而うして人材を敗壞することは、咸陽の郊、坑にする所の者、ただ四百六十余人なるよりも甚しきもの有り」（卷十六「擬題」と言うのは、ま

さに、上述の如き科挙の弊害を痛論したものであった。

こうした識者による科挙批判・八股文攻撃は、その後も続く。例えば、清朝後期の龔自珍（一七九二―一八四一）は、読書人の家系に生まれ、十九歳、監生（国学の生員）、二十七歳、挙人となり、まずは順調であったが、会試には四度も落第し、進士となったのは道光九年（一八二九）、三十八歳の時である（吳昌綬編『定龔先生年譜』に拠る）。その彼が、道光二年（一八二二）、国史館檢討官（内閣の属官）として都にいたころ、上司の高官に提出した意見書、「与人箋」が今伝えられている（王佩誥考定『龔自珍全集』第五輯所収、一九七四、中華書局）。その中の第五項で彼は、次のように、科挙の弊害を痛烈に衝き、制度の更改を強く訴えている。

今世、科場の文は、万喙相い因り、詞は狎して取るべく、貌は擬して肖るべし。坊間の刻本は、山の如く海の如くにして、四書文（『八股文』）の士に録せしむること、五百年、士の四書文に録せらるるもの、数万輩なり。既に窮まり既に極まれり。

閣下、何ぞ、今天子大いに為す有らんとする初めに及び、上書して、功令（官吏登用・升級制度）を改め、以て真才を収めんことを乞わざるや。

科挙試の内容方法からもたらされる弊害は、この時点、ま

さしく既に極まったといえよう。

五

ところで、明・清の科挙は、このように識者によって痛烈に批判されたばかりではない。既に初めに掲げた袁・張らの奏請の冒頭で、「科挙の弊は、古今人これを言うこと縶めて詳らかなり」とあったように、当路の要に在る者もまた、早くから且つ幾度も、科挙の弊害を指摘し、その是正更改が奏上されていた。しかし科挙は、清朝の末年に至るまで廃止されることなく続いた。それはいったいなぜであらうか。

実は、清初の科挙試で、八股文を課することを一時停止したことがある。『皇朝文献通考』巻四十八、「選舉考二、挙士」で、

康熙二年、八股文体を停止す。郷・会試にては、策論・表・判を以て士を取り、分ちて二場と為す。

というのがそれで、三場を二場に減じ、首場の経義題・八股文が廃止されることとなった。ただしそこでは、その廃止理由について言及されていない。ところが、康熙四年（一六六五）、礼部侍郎の黄機（後に宰相職の大学士となる）が上疏して、爾後は旧制に拠って行うべしと言い、それが受

納され、間もなく三場の旧制に復することとなった（『皇朝文献通考』同上）。

その時の黄機の言を見ると、首場で経義題を課する目的を、「先ず經書を用うるは、士子をして、聖賢の微旨を闡発せしめ、以て其の心術を觀る」ためであるとし、それ故に、それが廃止され、「經書を用いて文を為らざれば、人將に聖賢の学を不講に置かんとす。恐らくは、朝廷の科を設けて士を取るの深意に非ざらん」と言うのが、その要となっている（同上）。つまり、「設科取士之深意」、科挙試で経義題・八股文を課し、それを首場に置いて重視する意図は、受験者をして經書をよく学修させ、そこにこめられている聖賢の微旨を闡き発かにし、それを身に体していかに自己の心術としていけるか、それを觀ることに在り、したがって、それを廃止すべからずとするものである。

またその後、乾隆三年（一七三八）、兵部侍郎の舒赫德（後に大学士）が上疏して、科挙を廃止し、別に「真才実学」を選抜べき考試制度の検討を要請した。その上疏の中で、彼が科挙の積弊として指摘している点は、

時文は徒空言のみにして、用に適せず。墨卷房〔稿〕行〔卷〕は、輾転抄襲せられ、膚詞詭説は、蔓延支離し、苟しくも以て科第を取る可くして止む。士子は各おの一

経を占して、毎経題を擬し、多きものは百余、少なきものは数十なり。古人は畢生之を治むれども足らざるに、今は則ち数月之を為すのみにして余り有り（今、『清史稿』『選舉志三、文科』に拠る。もと『皇朝經世文編』卷五十七「礼政四」所収）。

と言っている通り、既に前節で述べたと同じ事柄、経義題・八股文の習練・習熟のため、捷徑を採ることから生じた弊害である。しかし、これに対する礼部の覆奏（上疏を検討した結果の答申）では、舒赫徳の上疏は採用されず、「科举制義は、以て廢せざるを得たり」（同上）となった。それはなぜか。

その覆奏は、極めて長文且つ多岐であるため、今、その全体に言及することを略すが、舒赫徳の上疏を採用しない理由につき、当面問題としている点から見れば、次の如く言っている所がその要点であろう。

時芸の論ずる所は、皆孔・孟の緒言、精微の奥旨なり。之を経史子集に参えしめて、以て其の光華を發かにし、之を規矩準繩に範らしめて、以て其の法律を密にす。小技なりと曰うといえども、文武幹濟、英偉特達の才は、未だ嘗て其の中より出でずんばあらざるなり。末流の失を力挽せんと思わずして、咎を作法の涼に転ずるは、

已だ過たずや（同上）。

右の文中の終わり、対をなしている「末流之失」・「作法之涼」とは、實際上、何を指しているのか、ややわかりにくい。しかし、経義題を八股文で論述することが「小技なり」と曰わ「れるとある限り、「末流之失」とは、舒赫徳の上疏という積弊の内容を指すものと考えられる。したがって、「作法之涼」とは、「科举制度制定方針の理解不足」という意味になると考えられる。とすれば、ここで言うこともまた、前述・黄機の言う所と、結局は同じ趣意であるといえよう。

科举試の内容方法からもたらされた弊害は、識者によって指摘・批判されたばかりではない。このように、当路の要に在る者の上疏でもまた、その弊害が指摘され、その更改・廃止が奏請されていた。にもかかわらず、それは更改も廃止もされず、ついに清末まで続いた。そのわけは要するに、科举の更改・廃止の奏請が、「設科取士之深意」に反するとされたためである。

ではいったい、科举設定の「深意」とは何か。それは、既に揚げた『明志』『選舉志、一二』の冒頭でも提示されていたが、前掲二例によっていえば、科举設定の「深意」とは、経書を学修させ、「士子をして聖賢の微旨を闡發せし

め、以て其の心術を觀ん」とするところに在り、「孔孟の緒言、精微の奥旨」を明らかにし、八股のきまりにのっとり、その密度を濃まやかならしめんとするところに在ったのである。それは、より端的にいえば、「四書」「五經」の經書を学び、それを規範とする精神生活が、中国人にとって当為である限り、それを基底に置き、それを根拠とする科挙は、廃止すべからずとするものである。明・清五百年、さまざまな科挙批判・八股文攻撃があつたが、それをくぐり抜けて科挙を持続せしめた根柢にあるものは、実に、經書を規範とする中国人の精神生活であつた。科挙は、いわばその基底の上に設立された制度であり、基底をなすものの持続こそが、本命であつたといえよう。

とはいひながらも、科挙と經書とのつながりは、極めて密なるものがあつた。それは、隋・唐の科挙の当初からのことであるが、今、それについて述べることは略す。したがつて、たとえ明・清の科挙が、經書の学修に対してまづとうな道を歩ませず、捷徑を採らせたとはいへ、それが、經書学修にとって全く無意味なものとは、直ちにはいえまい。捷徑とはいへ、「四書」「五經」に対する不断の学修なくして、科挙に合格するはずはない。また、八股文を空虚なもの、形式主義的なものと非難するのは、不当ではな

いとしても、八股文に期待するものが古聖賢の語氣・口氣の再現である限り、それは、当代、經書学修における本領とされたものである。經書学修で語氣・語調が重視されたのは、実に宋明性理の学においてであり、清朝考証の学が經書学修で目指すものも、古聖賢の言語の真実に迫り、そのまことの心をとらえんとすることであつた。科挙と經書の学修とは、ほとんど一蓮托生の關係にあつたといえる。

しかるに今や、その科挙が廃止され、千三百余年にわたつて続いた制度が終焉を告げることとなつた。しかも、そこに至る経路を振り返つてみれば、前述の如く、それは、ほとんど歴史的必然といわねばならぬほど、組織形態からも、内容方法からも、極まっていた。のみならず、科挙の廃止は、「時艱を補救」せんがためであつたのに、「時艱」はついに補救されず、清朝帝国は滅亡した。制度の更改とその実効は、すべて後に來たる政治体制に委ねられてしまつたのである。とすれば、科挙を基底で支え、それと一蓮托生のともいえる經書の存在は、果たしてどうなるであらうか。

六

經書「四書」「五經」が、經書の定立以後、長い間にわ

たつて、中国人の精神生活の規範たる形で持続されたことについては、既に、拙著『中国古典解釈史・魏晉篇』（第一章、第一節、一、中国精神史における経書の意義、一九六四、勁草書房）で述べておいた。ここでは繰り返さない。しかし、これまで考察してきた科挙の終焉、経書に基づく精神生活をその存続の根柢におく科挙が、清朝の末年に至って廃止されたことは、その後に来たる中国人の精神生活の形に、変更をもたらすメルクマールとは、果たしてならないであろうか。

経書の行方はどうなるであろうか。今、それを問うべき段階に至った。だが、それを論述すべき紙数は、もはやない。以下、簡条的な要約のみにとどめたい。

(一)科挙は隋唐帝国に始まり、集権的支配体制・君主独裁制と、相即不離の形で持続されて行った。科挙の終焉、ないしその後続く辛亥革命は、その支配体制の終焉と相即する。清朝帝国の滅亡後、その政体は、中華民国から中華人民共和国へと移ったが、その先はなお不明である。したがって、政体の変更から直ちに経書の性格変更をいうことは、今まだ早い。少なくとも、伝統的な中国的政治観が今後、どうなるであろうか、それを注視しなければなるまい。

(二)科挙は官吏登用試験制度であり、官吏は長い間、士大夫とよばれる読書人階層から出された。そうして、経書を規範とする生活は、読書人階層を中心となって持続されたものである。科挙の終焉・辛亥革命は、中国の社会階層から、読書人層を解体せしめたであろうか。そもそも中国の社会階層は、今後どうなるであろうか、それを注視しなければなるまい。

(三)中国では、科挙の終焉・辛亥革命の後、間もなくして、新文化運動、文学革命が興り、その結果、「文言から白話へ」、言語生活、書き言葉の改革が図られ、それが定着されたかの如くである。一方、経書を規範とする精神生活、特に文章表現は、たてまえとして文言によってなされるものである。経書の行方は、言語生活の変化と密接に関わるであろう。しかし、それも今、安易な結論を下すべきではあるまい。

(四)そもそも経書が定着した後、「経なるものは、恒久の至道、不刊の鴻教」（『文心雕竜』「宗經」）であり、変改すべからざるものとされた。しかし、宋を経、元・明を通り、清に至るまでに、「伝注」が疑われ、「詩序」が削られたばかりではない。経書の本文そのものの中から、「偽」が指摘されることとなった。今はまず、少なくとも

も書物としての經書の実態を、その真相においてとらえなおさなければなるまい。

(四) 經書の行方はどうなるであらうか。それを考察し究明するためにも、われわれは、今一度、その根源に立ち返るべきではないだろうか。經書は、いかにして形成され、且つその「伝注」を整えて定着するに至ったのか、と。